

平成30年7月豪雨災害の被災地を訪問した 看護学生の学び

祝原あゆみ, 渡邊 克俊

概 要

島根県立大学出雲キャンパス災害研究会の学生が平成30年7月豪雨災害の被災地である広島県南部のA町を訪問し、行政職員や支援者からの説明、被災現場の視察、応急仮設住宅住民との健康交流会を体験した。学生達は、甚大な被害を受けた現場を視察し、被災地にて様々な立場にある人々の話を聴いたり交流したりすることにより、被災地訪問後のレポート中に様々な学びを記述していた。レポートの記述の中から、学生が学び、感じ、考えた部分を抽出し、質的記述的に分析した。被災地訪問における学生の学びとして【被災するという現実】【平常時からの備えの重要性】【継続支援のための知識・技術の獲得への意欲】の3つのコアカテゴリが生成された。今回の被災地訪問は、学生の防災や災害支援活動への関心だけでなく、災害時の看護や保健に関する活動のためには、まず看護の基礎的な知識や技術が大変重要であることを理解し、学業への意欲を高めることが明らかになった。

キーワード：豪雨災害, 被災地支援, 看護学生, 学び

I. はじめに

近年、自然災害が頻発している。特に大規模な豪雨災害は、梅雨の末期や台風シーズンを中心に日本全国のどこかで毎年のように発生している。「線状降水帯」「特別警報」「激甚災害」などは、すっかり耳慣れた言葉になりつつある。

平成30年7月豪雨災害では、長時間にわたる記録的な大雨により、各地で河川の氾濫による浸水や土石流等が発生し、特に岡山県、広島県、愛媛県においては、多数の死者が発生するなどの甚大な被害となった¹⁾。被災地には多くのボランティアが訪れ、全国社会福祉協議会の報告によると、被災からほぼ3か月が経過した平成30年10月2日現在までに、岡山県では延べ8万人以上、広島県では延べ10万人以上のボラン

ティアが活動したと報告されている²⁾。

島根県立大学出雲キャンパス災害研究会(Disaster Study Assistance Circle以下、「DSAC」とする)は、災害支援に関心を持つ看護学科の1年次生が平成29年度に発足させたサークルである。メンバーは出雲キャンパスの看護学科及び健康栄養学科の学生(以下、「学生」とする)である。災害サイクル全体を幅広く研究し、また大学近隣の地域と連携して住民の防災活動についても考え実践していくことを目的に活動している。

平成31年3月に、DSACに所属する学生のうち希望者8名(内訳：看護学科2年次生6名、4年次生2名)が、平成30年7月豪雨災害の被災地である広島県南部のA町(以下、「A町」とする)を訪問した。参加した学生は看護学科2年次生が中心であり、災害看護や災害保健の知識が少ない者が多かった。しかし被災地訪問後のレポートでは、災害支援に関連する科目が未

3. 訪問の行程と被災の実態

被災地訪問の2週間前に、引率教員から参加学生に対して被災地の状況を写真で示し、訪問にあたっての留意点について共有する時間を設けた。

被災地訪問の行程を表1に示す。1日目は、A町役場で防災担当者や保健師から被災時の状況や保健活動について説明を受けた。防災担当者からは、人的被害は死者17名、行方不明者1名(平成31年1月1日現在)でその大半が高齢者であったこと、発災時は電話対応に追われたこと、山が崩れたことによる土砂災害であったため、もともと高齢化率の高い山側の住宅の被害が大きかったこと、被害の大きさや地形の特徴から救助に時間がかかったこと等の説明があった。保健師からは、発災の翌朝テレビに映った役場庁舎外の状況は現実として受け入れがたい光景であったこと、急性期の様々な混乱の中で、保健師は連絡・調整、さらに指示を出す役目を担うことになり、心の余裕を持っていない中で、応援派遣保健師のコーディネート、避難者の食事の工夫、慢性疾患をもつ避難者の薬の調達、医療確保のための調整等を行ったこと等が語られた。

役場で説明を受けた後、A町で最も被害が大きかったB地区を視察した。被災地NGO協働センターで活動している支援者の方の説明を受けながら、家屋の修復や取り壊しの工事の様子、ほとんど手つかずのまま残されている建物、住宅地であった場所がほぼ更地になっている様子、土石流によって運ばれた巨石など、現状を目の当たりにした。

2日目は看護学生による「災害支援活動」として、A町内にある応急仮設住宅(以下、「仮設住宅」とする)の集会室を会場に、仮設住宅住民(以下、「住民」とする)の方々を招いて健康交流会を行った。健康交流会は、学生による血圧測定、健康体操、島根から持参したお茶とお菓子での茶話会で構成し、住民14名の参加を得た。

4. A町の課題

A町の防災担当者や保健師の話では、被災時の課題として、県や災害支援団体とスムーズな

連携を取ることができなかったことが挙げられた。また、役場のライフラインが無事であったことは幸いであったが、今後は停電に備えて住民基本台帳等を紙ベースでも備えておく予定であること、町保健師が災害時の保健活動に専念できるような体制や、いざという時に医療機関との連携が取れるシステム整備の必要性等が語られた。

保健師は、月2回の連絡会議でA町地域支え合いセンターとともに、支援が必要な事例について情報を共有しているとのことであった。被災後9か月が経過しているが、現状の課題として、被災者はまだ元の生活に戻ることができていないこと、住民の精神的支援のための訪問や見守りなどの保健活動を継続しているが、日中は働き盛りの世代になかなか会えず、健康状態の把握や支援ができていないことが挙げられた。

IV. 結 果

被災地訪問に参加した学生のレポートから学びの内容を分析した結果を表2に示す。124のコードが抽出され、33のサブカテゴリ、8つのカテゴリ、3つのコアカテゴリが生成された。コアカテゴリを【 】, カテゴリを〈 〉, サブカテゴリを[]で示す。

1. 【被災するという現実】

学生達は、保健師の話や被災地の視察、住民との交流での話を通して、〈被災時の緊迫感や被害状況の大きさ〉や〈被災者ニーズへの対応の難しさ〉を実感していた。住民との交流では、被災後約9か月を経てなお被災者が抱える様々な思いを茶話会の中で感じ取り、被災者の声を直接聴くことの大切さを学んでいた。住民は血圧が高い方が多く、[健康に気を遣いながら生活をしている]様子であった。学生達は避難生活の継続や仮設住宅という生活環境が〈仮設住宅住民の健康意識の高さ〉に影響しているのではないかと推測していた。

2. 【平常時からの備えの重要性】

学生達は、被災地保健師と応援派遣保健師、

表2 被災地訪問における学生の学び

コア カテゴリ	カテゴリ	サブカテゴリ
被災する という現実	被災時の緊迫感 や被害状況の 大きさ	<ul style="list-style-type: none"> 被災地を見学し、大変な被害であったことを実感した 発災直後の緊迫感と大変な状況が伝わってきた 役場職員も含めて町民すべての人が被災者である 災害は住民同士のつながりを壊してしまうこともある
	被災者ニーズへ の対応の難しさ	<ul style="list-style-type: none"> 健康管理が後回しになってしまう住民への保健師としての関わりの難しさがあった 保健師は被災者の健康管理や衛生管理、支援の受け入れや連絡・調整等、様々な役割を果たしていた 食事の支援では、食品衛生、栄養バランス、美味しさ、治療食などの様々なニーズがあった 被災者が安心して生活できる場所の確保が必要である 夏の豪雨災害では食中毒や熱中症、感染症などの健康リスクがあるため健康への早急な対応が必要である 正しい情報を記録して正確に伝えることが重要である
	被災者が抱える 様々な思い	<ul style="list-style-type: none"> 被災者の生の声を聴くことができ勉強になった 被災者は様々な不安や様々な気持ちを抱えながら生活してこられた 9か月経っていても被災者の心の傷は癒えていない 地域の人たちは励まし合いながら生活されている 住んでいた場所でまた暮らしたいと前向きに生活している人もいる
	仮設住宅住民の 健康意識の高さ	<ul style="list-style-type: none"> 仮設住宅の住民は健康に気を遣いながら生活している 血圧が高い人が多い
平常時から の備えの重 要性	支援者・受援者の 相互理解や情報 共有が重要	<ul style="list-style-type: none"> 災害時の支援組織・受援組織の相互理解や情報共有が大切である 発災直後の混乱した現場では外部からの支援が活動を妨げる可能性もある 町保健師と応援派遣保健師がコミュニケーションをとりながら協力して住民を支援することが大切である
	平常時からの備え のあり方	<ul style="list-style-type: none"> 地域に合ったマニュアル整備と職員の適切な配置が重要である 平常時の地図や名簿の管理が災害支援に役立つ 常用薬の情報を携帯することは大切である
継続支援の ための知 識・技術の 獲得への意 欲	被災者との交流の 継続は大切な支 援	<ul style="list-style-type: none"> 継続的に支援していきたい 被災者の話を聴くことが大切である 被災者の交流ニーズが高い
	災害支援に役立 つ技術や知識の 獲得への意欲	<ul style="list-style-type: none"> 支援者同士が互いを理解し支え合って被災者を支援できるようになりたい 今自分にできることは災害に関する情報を発信することである 地域特性に合わせた関わり方ができるようになりたい 正確な看護技術や知識、コミュニケーション力を身につけることが必要である 被災地、被災者への考え方・接し方を見つめなおしていきたい 被災者とのコミュニケーション技術を身につけたい 災害について学びを深めていきたい

その他様々な支援団体との間で〈支援者・受援者の相互理解や情報共有が重要〉と考え、支援者同士のコミュニケーションの重要性を学んでいた。地域に合った災害対応マニュアルや支援体制の整備、停電時に備えた紙ベースでの情報管理といった行政側の課題とともに、住民が常用薬の情報を携帯する等の自助の必要性も感じており、〈平常時からの備えのあり方〉を考えていた。

3. 【継続支援のための知識・技術の獲得への意欲】

訪問したA町では、未だ被災者の心の傷は癒えていない現実があった。健康交流会を通して学生達は住民の交流ニーズの高さや傾聴の意義を実感し、〈被災者との交流の継続は大切な支援〉であると考え、今後も継続的な支援が必要という思いを持つようになっていた。また、被災地訪問を経験し、地域の特性に合わせた支援、正確な看護技術や知識獲得の必要性、災害支援についての学びを深めることなど、〈災害支援に役立つ技術や知識の獲得への意欲〉を持ち、今後自分が学ぶべき課題を考えていた。

V. 考 察

平成30年7月豪雨災害から9か月が経過した平成31年3月の2日間、DSACの学生が豪雨災害の被災地を訪問し、被災地の実態や課題を学んだ。学生の学びとして、【被災するという現実】【平常時からの備えの重要性】【継続支援のための知識・技術の獲得への意欲】の3つのコアカテゴリが生成された。

本稿では「被災地の実態と課題を学ぶ」という被災地訪問の目的に沿って、学生の学びを考察する。

1. 被災地の実態

学生は町職員や保健師の説明を聞き、実際に被災した地域を歩いたり被災者から話を聴いたりすることで、被害の甚大さ、災害時の緊迫感、被災者が抱える辛い思いを実感していた。

本学看護学科のカリキュラムでは、看護基礎

教育の「災害看護」は看護の統合分野の統合看護領域に必修科目として配置され、4年次春学期に履修する。保健師教育における健康危機管理も4年次秋学期の「公衆衛生看護管理論」の中で履修する。若杉らは自治体保健師の健康管理実践能力の実態を調査し、災害対応の経験が保健師の学習に効果的であると述べている⁴⁾。看護学生を対象とした被災地での公衆衛生活動に対する認識の調査によると、看護学生は職能的活動を希望しながらも活動することにためらいがあり、その主な理由は「責任が持てない」「大変そう」「難しそう」であった⁵⁾。一方、看護学生の被災地ボランティアについて、学生が被災者の感情に配慮し、精神的ストレスの緩和に向けて被災者の訴えを傾聴したという報告もある⁶⁾。今回の被災地訪問において、学生達は、A町保健師の話から被災者ニーズへの対応の難しさを、健康交流会では被災者とコミュニケーションをとることの難しさを感じていた。学生達は〈災害支援技術や知識獲得への意欲〉として、現在看護学生としてできることの他、看護職としての将来の職業観について考え、職業意欲を高めること、看護学生として被災者に関わる責任について学ぶ機会であったと考えられる。今回は災害サイクルの復旧・復興期にある被災地への訪問であったが、健康を切り口に仮設住宅の住民と交流した経験は、今後の看護職資格取得に向けた学習意欲の向上に効果的に働くことが期待できると考えられた。

大規模災害において、被災した自治体は支援活動に携わる多くの機関と連携することになる。支援活動や調査で収集した情報をカンファレンスなどにおいて多職種間で共有し、支援のギャップや重複に対する検証により、各機関の役割や業務範囲を明確化したうえで連携を図っていくことが重要である⁷⁾。学生達は被災地訪問を通じ、被災者支援の際には〈支援者・受援者の相互理解や情報共有が重要〉だと気づいていた。被災地支援に入る団体等が被災地の住民を支えるだけでなく、市町村保健師などの地元の支援者が活動しやすい環境を整えることの重要性を学んだと考えられる。

2. 被災地の課題

学生が仮設住宅の住民に行った血圧測定は予想以上に好評であった。学生達は一人ひとりの住民の身体に触れて血圧を測定し健康状態を聞き取ることに加えて、住民の気持ちや生活の厳しさも傾聴していた。前日に被災地の状況を学生なりに感じ取ってから住民と交流したことで、住民が被災後9か月を経てなお心に傷を負っているという現実、被災前後の健康状態の変化を受け止めることができ、A町の災害復興はまだ終わっていないことを理解することに役立ったと考えられる。

被災者の地域における心理的経過として、「茫然自失期」「ハネムーン期」「幻滅期」「再建期」が知られている。このうち「幻滅期」は被災後の混乱がおさまり始め、被災者の間にも被害や復旧の格差が出始める⁸⁾。今回仮設住宅で出会った住民の方々の語りや住民個人が独自に発行されている瓦版の記載からは、復旧が進み生活のめどが立ち始め、気分が安定する「再建期」には未だ達していない状況にあると推測された。「幻滅期」は人によっては数年間継続することもある。学生達は〈被災者との交流の継続は大切な支援〉だと学び、自身のコミュニケーション技術の未熟さを痛感しながらも懸命に被災者の語りに耳を傾け、傾聴という支援の重要性を理解していた。また、一度だけの視察やボランティアで終わらせるのではなく、主に精神的支援を中心とした継続的な交流の必要性や災害支援の多様性を学んでいた。

町保健師の話の中に出てきた、県や医療機関、支援団体等との連絡調整のシステム化や災害時保健活動の体制整備等の課題については、2年次生には理解が難しかったようであるが、平常時からの備えが自助・共助・公助ともに必要であるということは具体的に理解できていたと考えられる。

VI. おわりに

DSACは災害という同じ事象に関心を持つ学生のサークルである。被災地を訪問することにより、学生はメディア等からは伝わりにくい【被

災するという現実】に直面し、災害を生き延びるために【平常時からの備えの重要性】を実感していた。また、【継続支援のための知識・技術の獲得】として、災害時の看護や保健に関する活動のためには、まず看護の基礎的な知識や技術が大変重要であることを理解し、学業への意欲を高めることが明らかになった。

謝 辞

今回の被災地訪問は島根県立大学より平成30年度「地域貢献推進奨励金」の交付を受けて実施した。

被災地訪問においてお世話になりましたA町住民のみなさま、役場のみなさま、訪問をコーディネートして下さった被災地NGO協働センターのみなさま、その他、私達の学びのためにお世話になりましたすべてのみなさまに心から感謝いたします。

COI（利益相反）について

利益相反なし

文 献

- 1) 総務省消防庁. 平成30年版消防白書. 2019.8.9. <https://www.fdma.go.jp/publication/hakusho/h30/topics1/38135.html>
- 2) 社会福祉法人全国社会福祉協議会. 全社協 被災地支援・災害ボランティア情報. 2019.8.9. <https://www.saigaivc.com/20181002/>
- 3) 広島県. 統計情報 国勢調査. 2019.9.24. <https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/toukei/kokuseityosa.html>
- 4) 若杉早苗, 鈴木知代, 仲村秀子, 他. 自治体保健師の健康危機管理実践能力と災害の対応・学習経験との関連—ミニマム・リクワイアメンツ質問紙調査を活用した検討—. 東海公衆衛生雑誌, 2017; 5 (1): 128-136.
- 5) 原岡智子, 中村寿子, 尾島俊之. 災害被災

- 地での公衆衛生支援活動に関する看護学生の認識. 東海公衆衛生雑誌, 2017; 5 (1) : 170-174.
- 6) 新沼剛, 及川真一, 佐藤紘子, 他. 秋田県豪雨災害における日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学赤十字防災ボランティアステーションの取り組みと課題. 日本赤十字秋田看護大学紀要・日本赤十字秋田短期大学紀要, 2017; 22 : 87-94.
- 7) 曾根志穂, 武山雅志, 金谷雅代, 他. 東日本大震災被災地における公立看護系大学の学生災害ボランティア活動の実態と課題—今後の学生災害ボランティア活動とその支援の考察—. 石川看護雑誌, 2017; 14 : 127-134.
- 8) 外傷ストレス関連障害に関する研究会 金吉晴 編. 心的トラウマの理解とケア (第2版). 2006; 東京: じほう.

Learning of Nursing Students Visited the Area Heavy Rain Disaster in July 2018

Ayumi IWAIBARA, Katsutoshi WATANABE